

自然住宅

造り手と住まい手と自然との共生

安暖邸建築研究所 田久保美重子さんに聞く

最近、化学物質の影響によるアトピーやアレルギー、化学物質過敏症、慢性疲労などの健康被害がクローズアップされるようになった。しかし現状は、住まいの中に化学塗料・防虫剤・防カビ剤・防腐剤など様々な化学物質が当然のように使われている。たとえその害を知ったとして、解決の糸口はどこにあるのか、住、環境の問題をどう考えていけばいいのか、昨年の協同集会の環境の分科会で自然住宅について報告いただいた田久保さんにお話をうかがった。

お話を聞いたのは、調布市の分譲マンションを購入したSさんのお宅のリフォーム現場、Sさんがマンション購入後、部屋に入ってみるととても強くいやな臭いがしたという。検査依頼の結果は、トルエン・キシレン・パラジクロールベンゼン・ホルムアルデヒドをはじめとして、V.O.C（揮発性有機化合物）がWHO（世界保健機関）のガイドラインの10倍近く検出された。主にシステムキッチンと床材から発生していたということで、伺った時はすでに檜に漆を塗った床に張り替えられていた。

この日はNHK長野の取材が入っており、建築資材の見本などを前にしながらお話をうかがった。

「ほんもの」とは

父親が長年工務店を営んでいて、ゼネコンで仕事をしてきたものの、建材や家の建て方に疑問を



もっていました。65年頃ですか、通産省が省エネ構想を打ち出し、断熱材やアルミサッシを使って断熱性を高めることを奨励しましたが、父は新しいものを率先して取り入れていきましたが、これは壁内結露によってカビが出るなど、やればやるほど悪い結果が出て、その責任は地場の大工さんや工務店が負わされることになり、次第に大工さんたちは信用を失い、輸入物やハウスメーカーに淘汰されていくという経過をたどりました。

そんなことがあって、「ほんもの」とは何だろうと考え日本中の建物を見てまわり、気候風土にあった建築ということでたどり着いたのが、伝統的な日本の建築であり、「自然と共生する家づくり」という考え方だったのです。

自然住宅とは

材木はもちろん、漆や布など日本の風土で育った建築材料は、高温多湿の気候に適応してきました。自然素材は生きて呼吸をしていますから、四季折々の調湿作用が働き快適な生活を与えてくれますが、ただ天然素材を使えばいいというものではないのです。自然の建材の特徴を知って、その自然の建材の欠点を補う家を作らなければなりません。自然と共生する構法、地震に強い家ということで明治以前の貫構法といわれる方法を手がけています。

人間の行為は自然破壊を伴うことを知った上で、50年60年かかって育つ材木を使うということは、百年もつ家を作ることが必要ですし、それがほんとうに木を生かすこととなります。まして日本には、すばらしい伝統技術を持った職人さんがまだたくさんいます。木曾での漆作家との出会いから、漆・和紙・木・織物など伝統的素材に気づかされました。

自然住宅を造るということは、住まう側も造る側もただ物としての家を造れば良いということではありません。人間の生活は衣、食、住どれ一つとっても、自然の恵みをその基礎としています。全ての生物は自然のメカニズムに則して地球上での歴史を構成してきましたが、人がその掟を狂わし自然を破壊し自らの生命を危険にさらしています。

自然住宅の普及活動の提案は、自然と共生の精神に基づき、地球環境を考え、私たちの健康も守る、真に快適な住まいを普及させることを目的としています。その具体的な活動として、92年に安暖邸セミナーを開いて、「ほんものとは何か」「日本経済の背景と建築の動向」「木について」など様々なテーマで学び、衣・食・住の全ての分野の人と話し合いながら、誰でもが安心してらせる家づくりを目指して、「自然住宅・住まい方推進ネットワーク」を95年に作りました。

なぜ事業協同組合を

「信州自然住宅・住まい方推進ネットワーク」で勉強会を開いてきて、自然の素材を使って家を造ろうということになりました。しかし、天然素材さえ使えばいいのかというと、天然素材も使い方を間違えるとカビだらけになります。ビニールクロス等によってアレルギーや化学物質過敏症にはならなくとも、カビ・ダニのアレルギーの心配が出てきます。国は安いということで輸入建材を使い、国際間の貿易摩擦をそれで埋めようと進めています。しかし、その一方で地方の過疎化、すばらしい技術を持った人が食べられないという現実があります。また事務局をやっている、誤った情報で困られている消費者がたくさんいるということに気がつき、消費者セミナーも開いてきました。

そういった中で、誰が自然住宅を作るかが問題になり、自然素材を使うことを基本に建築に関わる人が組合を作ることになりました。事業協同組合「自然共生家造りの会」は、山で働く人、製材所で木を加工する人、組み立てる大工、家の構造や工法を研究する人、ネットワークの異業種交流で消費者と共に学んできた方々で構成されています。家造りを始める段階ではお互いが顔が見える間柄で、各々が自分の仕事に責任が持てるよう施主と直接契約を結ぶ方法をとっています。この方法で、仕事の流れ、仕事の内容が住む側（将来にわたって家を管理する）に、より明確になり、造る側には施主の意向が伝わり、職人が本来持ち合わせている創造と工夫が発揮できます。個人的レベルで物を造るのではなく、私たちが自然界の一部であるという意識のもとに、何をしなければならぬかを考えてものを造ろうとする協同組合です。

法律の弊害があって、事業協同組合を作るための手続き上の制約の多い中で、今は長野県から始めていますが、全国に作りたと思っています。

高いという感覚・安いという感覚

アレルギーをもった子どもの親は若い人が多いのですが、「子どものために自然住宅を造りたいけれども、10万とか20万円しかありません。」とおっしゃる方に、「とりあえずは木曾の檜で床を貼り替え、次にボーナスが入ったら今度はクロスを貼り替えましょう。」と提案し実際にそうしている方がいます。

日本の住宅は20年しかもたないように出来ています。高い・安いはローンが返せるかどうかというところが基準になっているようですが、人に掛けるのではなく、家に掛けるようにして、20年しかもたない家には20年ローン、50年以上もつ家には50年ローンができるように認めればいいのです。ハウスメーカーの提示価格は、本体工事費以外の費用を差し引いたものであったりして、実際にはもっとかかるとか、単純比較はできないのですが、20年保つ家が坪当たり63万円、百年保つ家が坪当たり70万円、健康を害さず、長持ちし、最後は地球に戻る、どちらが高いかということです。

集合住宅・賃貸住宅での試み

ネットワークの事務局に相談される方は、持ち家が分譲マンションに住んでおられる方々ですが、圧倒的に多くの方は賃貸住宅に住んでいます。賃貸物件はいかに多くの人を住ませるか、利益をあげなければならない商品ですから、室内の仕上材は最低価格の建材を使っていて、V.O.C汚染は深刻です。私も仕事柄多くの集合住宅を手がけてきましたが、ネットワークの活動に踏み切る前はとても心が痛んでいました。

1996年、2世帯長屋の住宅を考えていた方に、ハウスメーカーとは違う9世帯の集合住宅、内装は全て天然素材の計画を提出しました。賃貸住宅における環境のひどさと、住まい造りが自然との共生と大きく関わることをお話して、V.O.Cの発生する建材を使った建築コストと同じ価格でという条件で、1997年2月、9世帯の賃貸マンションが完成しました。材料を供給する産地（この場

合は木曾）に打ち合わせのために何度も足を運びました。住まい手の理解と協力、そして造り手の努力と協力が一致して初めて実現することです。

田久保さんは、高齢者住宅の勉強でスウェーデンやデンマークなどにも行き、北欧の住まいとは違って日本の住宅は健康者の為につくられていること。また、女性と男性の意識の差も大きいこと。そして1975年頃高島平に住んでいて、ずらーっと同じ建物が並び、同じような間取り、仕上げでそこで暮らしている人達が、閉鎖された空間で、自閉的にならざるを得ない状況など、いろいろなケースを見てきた中で、住宅問題は環境問題ばかりでなく様々な問題を含んでいることを感じてきたといわれる。

自然住宅をつくるということは、人と人がつながっていくことだとおっしゃる。一つの仕事をするのに、造り手同士はもちろん住まい手とも何度も話し合っただけで納得できるものを造ることが、流通から環境に到るさまざまな問題解決へつながることを話して下さった。

現在、事業協同組合「自然住宅家造りの会」は、申請を済ませ、4月はじめには認可がおりる予定とのことである。

（3月10日調布市にて 聞き手及び文責：佐藤）